２０２１年度
関西学院大学ロースクール
Ｄ日程

一般入試（法学未修者）

論　文　問題

《１０：００～１１：３０》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論　文　問題】

次の文章を読んで、〔設問１〕および〔設問２〕に答えなさい。

〔設問１〕

筆者が本稿で主張する「シェアド・リアリティ」の概念を、その要素と役割・機能を含めて説明しなさい。「シェアド・リアリティとは」という表現で始めること（１８０字以内）。

〔設問２〕

下線部で筆者は「一度形成された安全神話はなかなか破壊されない。」と述べている。筆者が考えるその理由を説明したうえで、筆者の考えに対するあなたの意見を簡潔に述べなさい（６００字程度）。

著作権許諾の都合上、未修論文問題については、
ホームページ上の公開は行っておりません。

閲覧を希望される方は、司法研究科事務室までお問い合わせください。

【出典】
下條信輔「潜在認知の次元――しなやかで頑健な社会をめざして」（有斐閣、２０１９年）より抜粋。

関西学院大学大学院司法研究科

2021年度入学試験　出題趣旨・解説・講評
【Ｄ日程：論文】

≪出題趣旨≫

筆者はカリフォルニア工科大学の知覚心理学者である。本書は、個体としての人間の心理分析を出発点として、社会的に共有される心理とその実態への影響を分析し、「人は見たいものしか見ない」「人は反証を見ても意見を変えない」「人は遠い未来のリスクを過小評価する」という結論を導き出す。そのことを前提に、福島原発事故がなぜ生じたのかを問うたうえで、カタストロフを避けるため、生物が本来もつ分散的・自己組織型知性を生かした、柔軟かつ頑健なネットワーク型社会の構築を提言している。

法曹を目指す者にとって、科学にもとづきよりよい社会制度構築を模索することが重要であり、論理的思考の鍛錬にもなると考え、出題した。

[設問１]は、法的思考に求められる「定義」と「要件」「効果」を意識した問題である。概念としては本文の冒頭の簡潔な定義と、社会心理学での用法および筆者による概念の拡張という形で明示されている。１８０字という字数からすれば、単なる一般的抽象的定義を超えた概念の説明が必要となる。

①個々人の心理リアリティが、②社会集団による共有され、③集団の価値観の体系性を構成することを述べる必要があるとともに、④教育等を通じて形成され、⑤身体・感覚や環境・文化の共通性でそれが強化されることについても触れるとよい。シェアド・リアリティがあると⑥成員間でのコミュニケーションや共感度が高まり、⑦実態社会にフィードバックされてそれを動かす（よい方向だけでなく悪い方向にも）ことになる。

［解答例］
シェアド・リアリティとは、個人が有する社会実態の受け止め方（心理リアリティ）が社会集団によって共有された価値観の体系をいう。教育などを通じて成員間で共有され、身体・感覚や環境・文化の共通性によって強化される。シェアド・リアリティは、集団内のコミュニケーションや共感度を高め、構成員の行動や世論を通じて実体社会に正負のインパクトを与えることになる。
（１７３字）

≪講評≫

制限字数の中に求められている要素をすべてコンパクトに組み込むには、概念説明に不可欠なキーワードを選択し、一旦それを消化したうえで、論理的にキーワードを組み込んだ文章を再構成しなければならないが、該当箇所をそのままコピペする傾向が強く、そのために、定義部分だけに終わって、実体社会への影響という機能部分が十分展開できていない答案もあった。形成・強化について触れた答案はほとんど無かった。定義を述べるルールとして「・・とは・・をいう」といった引き締まった表現方法を使うことが問いに対する直截な答えとして有効であることについてもきちんと学んでほしい。

[設問２]は、本稿全体の論旨の理解を前提に、筆者の結論についての理由づけを考える問題であるとともに、自分の考えを論理的に明快かつ簡潔に示せるかを試す問題である。論争的なテーマについての意見になるが、文脈にそって自分の意見の結論と理由を簡潔に述べることが求められている。

［解答例］

為政者や専門家は、経済的利益や文化の共通性によって、原子力発電は絶対に安全である、という神話つまりシェアド・リアリティを事故前に確固として共有していたところ、福島第一原発事故によって、この神話は崩れたと思われた。

しかし、以下の３つの心理的な要因によって、為政者・業界関係者の既存のシェアド・リアリティは維持され、現実とのギャップを一層大きくしている。

第一に、彼らはまずそれまでの原発への投資や研究というコミットメントの深さゆえに、今さら引き返すことはできないという心理に陥るからである。

第二に、そのような深いコミットメントがあるために、失敗に対して原発推進の方により深入りする方向に進んでしまう。自己のこれまでの選択を正当化する心理が強く働くからである。

第三に、人には損失確定を回避する傾向（ロス・チェイス）が強いからである。すなわち、原発政策を放棄するより、次の原発稼働では絶対事故は起こらないという将来への過度の期待に賭けてしまうのである。

私は、人間の心理から来る集団的な認知の歪みが、見るべきものを見ない姿勢につながり、リスクを軽視することにつながるとの筆者の指摘は、従来の工学的安全性の議論に新たな視点を加える貴重な指摘だと考える。ただ、同じ心理は、反原発側にも働くはずであるから、民主的な討議を通じたコンセンサスづくりは極めて困難であることも意味するように思った。

（５８７字）

≪講評≫

まず、安全神話がなぜ事故後も壊れないのか、その心理的な理由が問われているのだから、端的にその理由を解答すべきである。上記の１から３の理由を要約することは難しいことではないはずだが、3つに分けてきちんと要約できている答案は無かった。端的に理由に入らず、前置きとしてシェアド・リアリティが社会に負の影響をもたらす現象を長々と説明している答案もあった。

字数制限が厳しい中での自分の意見については、あくまで筆者の主張を前提にその本質的な議論の評価ないし批判を１つ述べれば十分である。筆者の議論の理解・消化が不十分なまま、自分の「価値観」を前面に出したような意見があったが、なぜそのような読み方になるのか理解が困難であったし、そういった意見はありうるとは思うものの（意見の方向性そのものでは評価を分けない）、筆者の見解とかみ合っているとは思えなかった。今後学ぶ法律においては、究極的には価値判断があるとしても、いかに結論を論理的に正当化するかが重要であり、小論文問題はまさにそういった論理構成力を問うているのだと理解していただきたい。